

「大逆」の僧・高木顕明の往還二回向理解について

菱木 政晴

一 往還二回向論の系譜

大逆事件に連座させられて獄死した高木顕明は『余が社会主義』という四〇〇〇字程度の一文を残している。

往還二回向とは、親鸞(一一七三—一二六二)の『教行信証』などで展開される真宗教学の根本概念のひとつである。親鸞は、この概念を、天親(世親)の『浄土論』の注釈書である曇鸞(四七六—五四二)の『浄土論註』から獲得した。

親鸞の往還二回向とは、衆生が浄土に往生する相(すがた)「往相」と浄土から還って他者を利他教化する相「還相」の二つのはたらきが、ともに浄土を建立した阿弥陀如来の本願力回向、すなわち、他力回向によるという思想である。仏教は、神などの超越者によって救済されることを目的とする宗教ではなく、自ら目覚め、他者を教化することを目的とする宗教である。前者を自利、後者を利他と称し、仏教は自利利他円満の宗教であるということもできる。浄土真宗も仏教であるからには、単なる救済宗教ではないので、衆生自らが浄土往生するだけでなく、浄土から娑婆世界に還って他者を利他教化するというすがたをとることは当然のことである。ところが、他力という概念と衆生が自ら他の衆生(他者)を利他教化するということに違和感を感じるからなのか、あるいはまた、教化は本願寺当主のみの専権とする教団秩序への配慮のせい、二相が(とりわけ、還相が)衆生の現実のすがたであると考えることに対して抵抗がある。この学問的混乱(?)のひとつの原因は、天親(世

親)の『浄土論』においては、自利・利他がともに衆生(菩薩)の実践(具体的には、五念門・五功德門)として語られているのに対して、『論註』では、第五回向門、園林遊戯地門のみが、衆生ではなく阿弥陀如来に帰せられているかのごとくに表現されていることにある。親鸞は『証卷』の還相回向解釈においてこの矛盾を解決していると思われる。これは、香月院深励などによる伝統的解釈においても踏襲されている。

二 高木顕明の往還二回向理解

『余が社会主義』に、直接に往還二回向という言葉は登場しない。しかし、つぎのような言葉によって彼が往還二回向をどのように考えていたかを推し量ることができる。第三章「社会」では、「弥陀と違はん通力を得て、佛心者大慈悲是なりと云ふ心に成つて、他方国土へ飛び出して有縁々々の人々を済度するに間隙のない身となる故に極楽と云ふ」とある。他方国土へ飛び出す、すなわち、還相するのは衆生自らであることが示されているし、「眞に極楽土とは社会主義が実行せられてある。依而余は非開戦論者である。戦争は極楽の分人の成す事でありと思ふて居る」として、自分がこの現実社会で非戦論者であるのは、自らが浄土往生して極楽の分人・人数となった(往相した)からだとしている。また、最終章「実務行為」においては、「此の闇黒の世界に立ちて救ひの光明と平和と幸福を傳道するは我々の大任務を果すのである。(中略)諸君願くは我等と共に此の南無阿弥陀仏を唱へて生存競争の念を離れ共同生活の為に奮励せよ。何となれば此の南無阿弥陀仏を唱ふる人は極楽の人数なればなり」とあって、われわれ自身が利他教化の

大任務を果たすのだという決意が示されている。すなわち、弥陀の他力回向を根拠として、衆生自らが自利利他円満の仏道を主体的に歩む形になっている。

こうして、浄土真宗は、われわれ普通の人間自身の実践によって、「念佛に意義のあらん限り心零上より進で社会制度を根本的に一変する」ものの、すなわち、宗教であると同時に社会主義でもあるものとなって現代にのみがえったのである。

斎藤茂吉と浅草寺

小泉 博明

夙慧であつた斎藤茂吉は、一八九六（明治二九）八月に上山尋常高等小学校を卒業すると郷里の山形県上山金瓶村を離れ、浅草三筋町にある養父紀一の経営する浅草病院へ寄寓した。上京する前の茂吉の宗教的な原風景を考察するに、まず実父守谷熊次郎（後に伝右衛門）が熊野三山や蔵王山に対する信仰心が篤く、念仏信者でもあつたこと、神仏習合的な色彩の強い山岳信仰をもつ山形県の風土に育つたこと、さらに金瓶村宝泉寺の佐原隆應和尚の薫染により浄土教的な信仰心が醸成されたことである。このように熱心な念仏者である父と、山岳信仰の宗教性を持つ山形県の風土と、菩提寺の佐原隆應の薫染が三位一体となり、茂吉の血となり肉となり、茂吉には仏教的なものが体内に血脈相承したと言える。そして、この宗教的な原風景が、浅草寺への信仰へと継承されるのである。

茂吉は養父紀一の浅草病院へ寄寓するが、すぐに正式の養子となつたわけではない。茂吉は医者となることが、そして「感

謝せられざる医者」と言われた精神病医になることが宿縁であつた。茂吉自らは、精神病医を「狂人守」と呼び歌に詠んだ。茂吉は第一高等学校を卒業し、東京帝国大学医科大学への入学が決まり、一九〇五（明治三八）年七月に、漸く紀一の次女である子の婿養子となり、自らの居場所が確保できたのであつた。その間の茂吉の境涯を慮るに粒粒辛苦の日々を積み重ねたのであつた。

上京後、茂吉は東京府開成尋常中学校へ編入学した。茂吉がはじめて浅草寺へ詣でた月日は判明しないが、おそらく徒歩圏内である浅草寺へすぐに詣でたと考えるのが自然であろう。浅草寺に関する歌の初出は、開成中学校三年生であつた茂吉が、一八九九（明治三二）年一月七日に詣でた時の歌であり、台湾へ出征中であつた次兄守谷富太郎宛書簡に六首記されている。金瓶村から上京した茂吉にとって、浅草はどんなに刺激的で魅力的な街であつたろうか。素直に新年を言祝いだ歌で、とくに秀歌でもないが、隅田川があり、当時は田圃も残っていて、とび（とんび）が生息して、凌雲閣の上空をとびが舞っているという情景である。浅草という磁場に老若男女が引き寄せられるのは、金龍山浅草寺という観音霊場という信仰の場だけではなく、六区を中心に劇場や後には映画館が林立する歓楽街、さらには裏には玉の井、吉原という遊里（悪所）を控えた場であつたからである。同年五月には、浅草三筋町から神田区和泉町の東都病院へ、そして一九〇三（明治三六）年八月には紀一が創設した赤坂区青山南町に偉容を誇る青山脳病院に居を移した。茂吉は「折に触れ」て、浅草を題材とした歌を詠み、巣鴨病院